

写真集出版記念 下瀬信雄写真展

「萩の日々」 DAYS IN HAGI



1998年9月4日(金)～9月9日(水)

本館ギャラリー

萩の日々・DAYS IN HAGI

【発刊記念】写真展に寄せて

下瀬 信雄 《Shimose Nobuo》

彩陶庵発行の「陶子」刊行のおり写真に文章を少し付けた”フォトエッセイ”を掲載しないかという話がありすぐに乗った。

なにしろ”エッセイスト”などと名乗っていても大手雑誌社からの依頼はめったになく、たまにあるのは地方紙のノーギャラのものばかり。ひどいになると、インタビューと称してライターが文章を書き私はしゃべるばかり。菓子折とかテレカとかをもらって帰る。私の時間と見識(そんなに大げさなものではないが、)はいったいどうなるのだ。

というわけで、これで少しはエッセイストの名に恥じない連載が出来るものと期待し(ついでにそれ相応のギャラも期待し、)「ふわふわととぶもの」と言うタイトルのフォトエッセイはスタートした。

「ふわふわととぶもの」と言うタイトルは極楽トンボの私が空中や水中や場合によっては宇宙に浮かんでいる、文字どおり「ふわふわと飛んでいるもの」を撮影するという趣向で、このシリーズは必然的に35mm判小型カメラの出番となった。

それまでどちらかという「作品」主義の私としては三脚を付けてがっちり撮った大型カメラの作品こそ作品の名にふさわしいと考えてきた節があって、（ライカ使いの名手であるカルチエ・ブレッソンや木村伊兵衛の作品が目の前にちらつき、）なかなか余技の段階を出ることが難しいのも事実であった。

「陶子」に連載をはじめ、あらためて文章（思想）と映像（感性）の関係について想いを巡らせたことも収穫であった。

それまでは写真に小さなキャプションを付けるか、文章が主のエッセイにカットの写真を添えるという構成がほとんどで、どちらかは添え物的な扱いだったのだが、ここではそれぞれが独立した力を持ち、しかもその写真が成り立っている考え方までも紹介し、しかもおもしろい読み物にしたいという、かなり欲張った目標をたてたことであった。

写真はカメラがあっただけではもちろん撮れない。思想の裏打ちというか考え方は自ずから写真に反映し、それがなければただ目の前にある映像に過ぎない。では思想があれば写真が撮れるかということ、もちろんそれだけで撮れるわけではない。と言う写真を始めるに当たって最初に出会う大命題に帰り着いたのだ。もちろん答えは出ていない。

その後「陶子」の巻頭を飾る「ふわふわととぶもの」（最初は巻頭ではなかった。出世したのだ）は好評連載中で作品は徐々に増えていった。そしてこの作品群は「萩の日々」を編集するに当たって重要な核となったのである。

「陶子」のギャラは江戸時代そのままの石高と言う現物支給で行われる。

わが家の米倉（レバーを押すと何合かがザーと出てくるやつ）に直接納められる構造になっているらしい。女房に内緒の小遣いとはいかないのだ。